

高校入試における調査書の意味と機能に関する実証的研究（1）

— 「入試制度と学校生活に関する調査」の仕様と基礎分析 —

比較教育社会学コース 中村 高 康
比較教育社会学コース 林 川 友 貴

An Empirical Study on School Report System for High School Entrance Selection in Japan I: Specifications and Basic Analysis of the Survey Data

Takayasu NAKAMURA, Yuki HAYASHIKAWA

The aim of this study is to examine the school report system for high school entrance selection in Japan by analyzing the original survey data. In order to achieve this goal, we conducted a web survey for 2,970 high school students in Japan. Our findings were as follows: 1) several junior high school students were concerned about the influence of school reports to high schools they wanted to enter, and their school lives seem to be affected by this aspect of the system; and 2) Intermediate students, in terms of academic level, were more affected by this phenomenon than top level students. These findings reveal the importance of conducting further analysis of the high school entrance selection system in the domain of sociology of education.

目 次

- 1 問題の所在
- 2 調査設計とデータの特徴
 - A 調査デザイン
 - 1 目標サンプル数の設定とサンプルの割り当て方法
 - 2 調査モニターを対象とするウェブ調査の採用
 - B 他の調査結果との比較
- 3 基礎集計データから見る調査書の意味と機能
- 4 調査書利用を意識した行動の分析
 - A 内申書支配率
 - B 内申書支配と高校入学難易度
- 5 おわりに

1 問題の所在

教育選抜の問題といえば、昨今では高大接続改革に絡んだ大学入学者選抜への注目度が高い。実際問題として、大学入学者選抜は日本の教育システムのありようを大きく規定してきた以上、その点に注目が集まるのは当然ではある。

しかしながら、教育選抜の構造的な問題を考えた場合、大学入学者選抜と同等以上に重要な位置づけを担っていると考えられるのが、高校入学者選抜であ

る。

ところで、教育社会学においては、高校入学者選抜そのものよりは、トラッキング概念の導入によって、高校段階での進路の水路付け機能に注目してきた。ただし、日本においては、Rosenbaum（1976）の学校内分化を軸とした本来のトラッキング概念とは少々異なる形で、高校間の階層的構造を一種のトラックとみなし、この格差構造が高校生に与える影響を中心に検討が行われてきた（例えば、藤田 1980、中西他 1997、樋田他編 2000、尾嶋編 2001、樋田他編 2014、尾嶋・荒牧編 2018、など）。それは高校間格差構造が日本社会において圧倒的なりアリティを持っていたことの反映でもある。

そうした高校間階層構造による水路付けがかなり作動しているとすれば、進路の分化過程を理解するために観測しなければならないのは、高校入学前の段階、とりわけ決定的な高校格差構造へのふるい分けを行なう高校入学者選抜こそ、教育選抜研究のもう一つの核となるべき対象である。ところが、問題の重要性に比して、教育社会学における高校入学者選抜の研究は、きわめて少ない状況にある。そこで、本研究では高校入学者選抜の過程を実証的に明らかにすることを目的とする。

なお、一言で高校入学者選抜といっても、その分析

視角は無数にある。そこで今回はまず、研究の焦点を「調査書選抜」に重点化することにした。その理由は、現在進行中の教育改革において強調されている“学力の3要素”，すなわち「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に他者と協働して学ぶ態度」を選抜においても重視することが政策的に求められており、とりわけ第三の要素である「主体的に他者と協働して学ぶ態度」（以下、主体性評価と表記）を測定する際のツールとして、大学入試改革でも調査書に注目が集まっていることを考慮したためである。

主体性評価を入学者選抜で導入していくことの問題は、中村（2020）や大多和（2020）でも指摘されているが、もっとも大きな課題は、日常生活における態度までもが選抜資料になることによって、生活全体が受験の一環として位置づけられてしまう面があることである。そして実は、そうした主体性評価の問題は、50年以上前から高校入試における調査書重視選抜で生じ、批判されてきた論点と同じである。

高校入試における調査書重視選抜は、中村も指摘しているように、すでに戦後教育改革期から制度的には導入されていたが、1960年代に受験競争批判を背景として強化されて今に至る歴史がある（中村 1999, 中村 2011）。折しも、広島県では高校入学者選抜における調査書の比重を下げる改革が行われ、注目されているところである。大学入試に先駆けて全面实施されてきた高校の調査書重視選抜が今、現実にはどのような事態を生み出しているのか、まずはその基本的なところから実証的分析を蓄積していくことが重要である。そこで本稿では、その問題に焦点化して調査結果を報告し、次の研究課題につなげていくことにしたい。

2 調査設計とデータの特徴

本来であれば、進路選択・選抜の過程を調査するためには、中村編（2010）で行われたような量的・質的な継続的調査を中学校で行なうことが必要である。しかしながら、昨今のコロナ禍の情勢のなかで、学校調査を行なうこと、それも繰り返し実施するような性格の調査の実施はきわめて困難な環境にある。そこで本研究では、回顧的にはなるが全国から満遍なく実状を調査できるウェブ・モニター調査（「入試制度と学校生活に関する調査」（研究代表者：中村高康）を緊急に行い、その結果を検討の足掛かりとすることにした¹⁾。当初の研究計画とはかなり異なるものの、現在の情勢下では最善の調査方法であると判断した。

A 調査デザイン

特定の学校の生徒を追跡するのではなく、むしろ横断的に全体状況を把握することを目指す方針に切り替えたことから、最善の選択は高校生を対象とする全国ランダムサンプリングによる質問紙調査である。しかし、高校生を対象とした抽出名簿はありえず、また学校単位で抽出を行なっても、協力を得られないケースが多いと予想される。加えて、研究予算の制約もあることから、今回は調査会社に登録されている調査モニターの中から調査対象者を抽出する方法を選択した。こうした方法は、一般的にはランダムサンプリングの調査と比較して調査の精度が劣るとみなされる傾向にある。しかし、先ほども述べた通り、ランダムサンプリングの調査を実施しても、相当数の非協力校が生じることが予測される高校経由の高校生調査では、やはりデータは大きく歪むことになる。今回の場合は、こうした偶発的な歪みで都市部にサンプルが集中するなどの結果を許容するよりは、「全国」のデータをバランスよく集めることを優先し、性別及び都道府県別のクォータ・サンプリングを行なうことにした。

1 目標サンプル数の設定とサンプルの割り当て方法

予算との兼ね合いで最大限実施できるサンプル数として、3000サンプルを設定した。この3000を、まず男女で1500ずつに分け、そのうえで文部科学省の学校基本調査（令和元年度）で確認できる男女別・都道府県別の高校在学者数に比例する形で割り当てた。表1は実際に回収できたサンプル数を合わせて表示し、その増減関係も示しているが、全体として男性サンプルが当初割り当て数よりもやや少なく、特に西日本で全体に不足気味の状況が見て取れる。これは男性かつ高校生の登録モニター数が少ない地域で主に生じていると推測される。ただし、不足のケース数は全体で100ケースに満たないため、トータルな集計には大きな支障はないと判断した。逆に女性のサンプルは、当初割り当て数よりすべての地域で多くなっており、数としては十分に確保できている。ズレも各県ごとに数ケース程度であり、ほぼ計画通りのサンプルが回収できたといえる。

2 調査モニターを対象とするウェブ調査の採用

本研究では、上述のようなクォータ・サンプリングに加えて、調査モニターを対象とするウェブ調査を採用した。ウェブ調査は、近年よく用いられるようになった手法であり、その方法には世界中で注目が集まっている（Tourangeau, Conrad & Couper,

表1 男女別・都道府県別割り当てサンプル数および回収数

男性

| 都道府県 | 北海道 | 青森 | 岩手 | 宮城 | 秋田 | 山形 | 福島 | 茨城 | 栃木 | 群馬 | 埼玉 | 千葉 | 東京 | 神奈川 | 新潟 | 富山 |
|-------|-----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|-----|----|-----|-----|----|------|
| 割り当て数 | 58 | 16 | 15 | 28 | 11 | 14 | 23 | 36 | 25 | 25 | 84 | 71 | 144 | 96 | 26 | 13 |
| 回収数 | 60 | 17 | 16 | 29 | 9 | 14 | 24 | 25 | 25 | 26 | 87 | 74 | 149 | 99 | 25 | 14 |
| 増減 | 2 | 1 | 1 | 1 | ▲2 | 0 | 1 | ▲11 | 0 | 1 | 3 | 3 | 5 | 3 | ▲1 | 1 |
| 都道府県 | 石川 | 福井 | 山梨 | 長野 | 岐阜 | 静岡 | 愛知 | 三重 | 滋賀 | 京都 | 大阪 | 兵庫 | 奈良 | 和歌山 | 鳥取 | 島根 |
| 割り当て数 | 15 | 10 | 12 | 27 | 26 | 47 | 91 | 22 | 19 | 33 | 104 | 64 | 17 | 12 | 7 | 9 |
| 回収数 | 16 | 11 | 10 | 28 | 20 | 40 | 94 | 13 | 20 | 34 | 108 | 66 | 17 | 10 | 5 | 2 |
| 増減 | 1 | 1 | ▲2 | 1 | ▲6 | ▲7 | 3 | ▲9 | 1 | 1 | 4 | 2 | 0 | ▲2 | ▲2 | ▲7 |
| 都道府県 | 岡山 | 広島 | 山口 | 徳島 | 香川 | 愛媛 | 高知 | 福岡 | 佐賀 | 長崎 | 熊本 | 大分 | 宮崎 | 鹿児島 | 沖縄 | 合計 |
| 割り当て数 | 25 | 34 | 15 | 9 | 12 | 16 | 9 | 60 | 12 | 17 | 22 | 15 | 14 | 21 | 21 | 1500 |
| 回収数 | 21 | 34 | 12 | 5 | 8 | 17 | 1 | 41 | 11 | 11 | 9 | 8 | 10 | 13 | 14 | 1402 |
| 増減 | ▲4 | 0 | ▲3 | ▲4 | ▲4 | 1 | ▲8 | ▲19 | ▲1 | ▲6 | ▲13 | ▲7 | ▲4 | ▲8 | ▲7 | ▲98 |

女性

| 都道府県 | 北海道 | 青森 | 岩手 | 宮城 | 秋田 | 山形 | 福島 | 茨城 | 栃木 | 群馬 | 埼玉 | 千葉 | 東京 | 神奈川 | 新潟 | 富山 |
|-------|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|-----|-----|----|------|
| 割り当て数 | 59 | 16 | 15 | 28 | 11 | 14 | 23 | 35 | 24 | 24 | 79 | 70 | 150 | 97 | 26 | 13 |
| 回収数 | 61 | 17 | 16 | 29 | 12 | 15 | 24 | 37 | 25 | 25 | 82 | 73 | 155 | 100 | 27 | 14 |
| 増減 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 3 | 3 | 5 | 3 | 1 | 1 |
| 都道府県 | 石川 | 福井 | 山梨 | 長野 | 岐阜 | 静岡 | 愛知 | 三重 | 滋賀 | 京都 | 大阪 | 兵庫 | 奈良 | 和歌山 | 鳥取 | 島根 |
| 割り当て数 | 15 | 10 | 11 | 26 | 26 | 45 | 92 | 22 | 18 | 33 | 105 | 65 | 16 | 12 | 7 | 8 |
| 回収数 | 16 | 11 | 12 | 27 | 27 | 47 | 95 | 23 | 19 | 34 | 109 | 67 | 17 | 13 | 8 | 9 |
| 増減 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 3 | 1 | 1 | 1 | 4 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 都道府県 | 岡山 | 広島 | 山口 | 徳島 | 香川 | 愛媛 | 高知 | 福岡 | 佐賀 | 長崎 | 熊本 | 大分 | 宮崎 | 鹿児島 | 沖縄 | 合計 |
| 割り当て数 | 25 | 34 | 16 | 9 | 12 | 16 | 9 | 62 | 11 | 17 | 22 | 15 | 14 | 22 | 21 | 1500 |
| 回収数 | 26 | 36 | 17 | 10 | 13 | 17 | 10 | 64 | 12 | 18 | 23 | 16 | 15 | 23 | 22 | 1568 |
| 増減 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 68 |

2013=2019)。また、日本でも『社会学評論』誌における「インターネット時代の社会調査法」なる特集が組まれていることからわかるとおり、学術的にもその利用が検討されつつある。しかしながら、その特集のなかで三輪・石田・下瀬川（2020）が指摘しているように、調査会社に登録されたモニター（アクセスパネルとも呼ばれる）に対する調査を行なう場合、標本の代表性の科学的評価が難しい。また吉村（2020）によれば、調査対象者が自発的に参加した者のみであることのバイアス、すなわち自己選択バイアスが少なくない影響を及ぼすという。この場合は様々な統計的手法を駆使して補正をかけてもバイアスを完全に除去するのは難しいとされる。

本研究では、調査会社による登録調査モニターを用いており、その影響を否定することはできない。しかし、先ほども述べたように、現下の社会情勢および調査条件下で他に全国の高校生からバランスよく回答を得る有力な代替方法がないという判断がある。そこで、不十分ではあるものの、得られたデータの歪みを他の調査結果やセンサス等と対比することで、少なくとも我々の関心から予想される集团的歪みがさほど大

きくない可能性を示すことにする。本調査の信頼性および調査結果の補正方法については今後の検討課題とし、本稿は第一次報告として本調査結果をそのまま提示しておくことにする。

B 他の調査結果との比較

以上の手続きを経て得られた調査データについて、いくつかの基本変数の結果を他の調査結果と対比してみよう。

男女比については、すでに表1に示した通り、分析の便宜を考えて男女は1500人ずつ割り振っているが、実際には学校基本調査の高校生数を見ると男性のほうが人数が若干多い（男性1,601,977人、女性1,566,392人：令和元年度）。したがって、本調査サンプルはやや女性が多いサンプルとなっている。ただし、ほぼ50%ずつになっているという点では大きな偏りはない。

都道府県別の分布についても、割り当ての基準に使用しているため、ほぼ全体の分布を正確に反映している。さきほど指摘したように、西日本地域の男性が予定よりも少なくなっている傾向にあるが、各都道府県の割り当てサンプル数を当該都道府県の回収サンプル

数で予測するシンプルな回帰式を立てると、決定係数は男性0.98、女性1.00となる。つまり、細部はともかく全体として見れば、回収サンプルの都道府県別分布はほぼ全国の実態と重なっているとみなしてよい。

学年に関しては、特に層化・割り当て条件には入っていないが、これも回収サンプルは全体をほぼ三等分する形で分布している（1年生：34.1%、2年生：35.9%、3年生：30.0%）。これは当然ながら全国の分布（各学年それぞれ約33%）とほぼ一致している。

次に、回答してくれた高校生の所属する学科の分布を学校基本調査と対比したのが、次の図1である。これを見ると、普通科の生徒の比率はほぼ学校基本調査と同じであり、専門学科で多少の増減があるものの、ここでも大きな偏りは見いだせないといえる。

続いて、学校の設置者すなわち国公立の構成比も学校基本調査と比べておこう（図2）。これも同様に、公立・私立・国立の構成比は全国分布とほぼ同じである。

以上のように、調査項目から学校基本調査と対比可

能な要素を取り出してみたところ、いずれも全国分布とかなり高い一致が見られた。少なくとも、学校及び地域の特性については、かなりの程度全体の分布構造に近いデータが得られていると推測される。

ただし、個人レベルの変数についてはまだ検討の余地がある。この点は今後さらに詳細に検討を進める予定であるが、一例として親学歴の分布を検討した結果を報告する。この調査では親の学歴を尋ねているため、父親または母親の学歴構成を検討できる。全国調査のデータから同等の数値を出すことが可能であるため、成人を対象とする代表的な社会調査である2015年SSM調査（社会階層・社会移動全国調査）で同世代の子ども（2001～2003年生まれ）がいるサンプルをソートして、その大卒比率を算出してみた²⁾。その結果、大卒比率については父親・母親どちらも10%ほど本調査の回答者のほうが割合が高いことがわかっている（父親はSSM34.3%：本調査43.2%、母親はSSM18.5%：本調査28.1%）。SSM調査には中卒や高校中退の子どもを持つ回答者も含むなど微妙に条件が

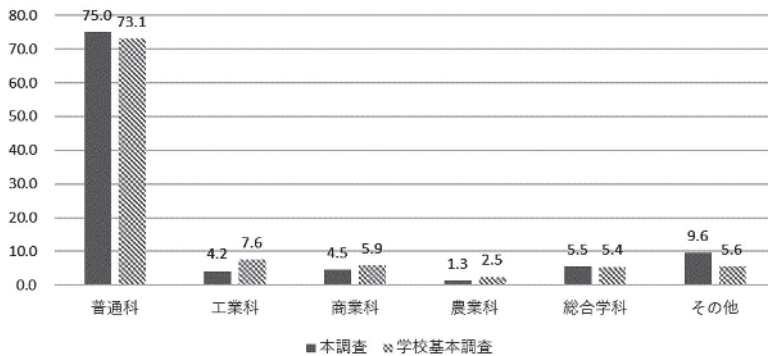


図1 調査における各学科の構成比

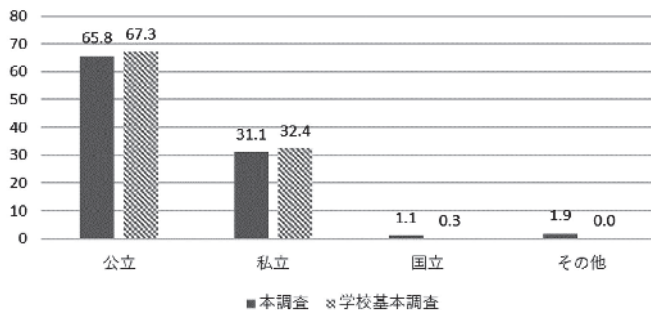


図2 調査における高校設置者の構成比

揃っていないため厳密な比較はできないが、本調査では高学歴の親を持つ層がやや多くなっている可能性がある。ただし、例えば母親の短大・高専・専門学校卒業率比率はかなり一致しているなど、調査実施前に懸念していたような極端な歪みはむしろ見られない。したがって、以下では暫定的に、日本の高校生全体の傾向を本調査データが大まかに示すものと想定して、分析を進めることとする。

3 基礎集計データから見る調査書の意味と機能

本調査において設定した質問項目（抜粋）は、以下の表2のようになっている。

このうち、直接的に内申書（調査書）の問題について尋ねている項目について、集計結果を提示しておく。

まず高校受験に向けて内申書（調査書）を意識した時期を尋ねたQ11の結果を示したのが、次の図3である。質問文は「あなたは、高校受験の際に用いられる内申書（調査書）をどの程度意識して生活していましたか。ア～エのそれぞれの時期ごとに、あてはまる番号をお選びください。（それぞれ1つずつ）」というも

のである。ここでは明らかに学年進行とともに内申書を意識せざるを得なくなっている状況があらためて確認できる。中学3年時点では、半数弱の生徒が「とても意識」していたと振り返っている。

次に、内申書に関する様々な経験を回答してもらったQ12を見てみよう。具体的な質問文は「内申書（調査書）について、次のようなことはあなたにあてはまりますか。ア～ケのそれぞれについて当てはまる番号をお選びください。」となっている。その結果が図4である。

尋ねている内容は様々だが、注目すべき点は、カ）で内申書の効力を感じている人がほとんどである一方で、そのこと自体を忌避する感情を持つ人の割合は、キ）に示すように3割弱であるということだ。これを多いとみるか少ないとみるかは微妙だが、内申書を批判的に見る生徒たちが一定数以上存在するということはいえるだろう。実際、自由記述欄でも内申書に対する批判的言説は相対的に目立っている。嫌な人にはとても気になるもの、という位置づけなのかもしれない。

一方でク）やケ）のように日常の態度や意欲を評価されることをむしろ歓迎する生徒が非常に多いことは注

表2 「入試制度と学校生活に関する調査」項目（基礎項目及び大学入試関連項目を除く。抜粋）

| |
|--|
| 中学校での部長・委員長経験 |
| 中学校での様子：生徒会役員立候補、学級委員立候補、部活・委員会熱心度、遅刻、欠席、ボランティア活動熱心度など |
| 内申書（調査書）を意識した時期 |
| 内申書（調査書）についての学校での様々な経験 |
| 内申書（調査書）を意識した行動をしたか |

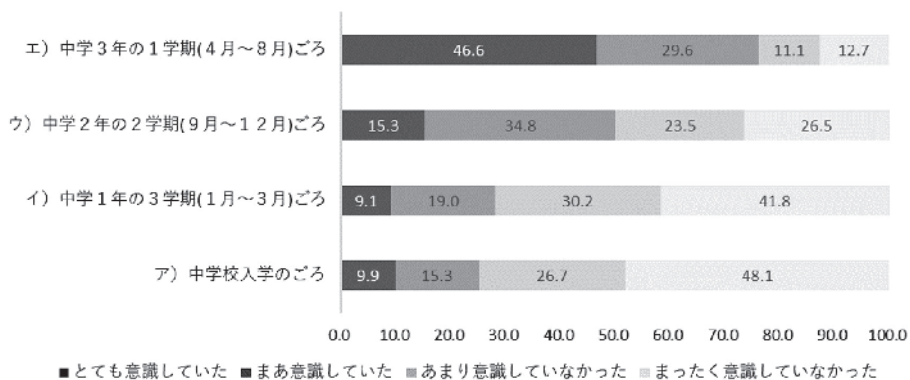


図3 中学校で内申書を意識していた程度（時期別・％）

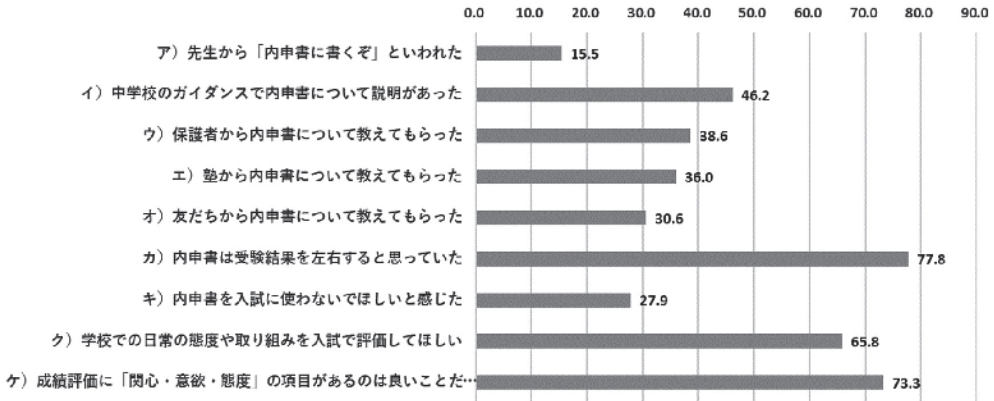


図 4 内申書（調査書）に関する様々な経験・意識（「あてはまる」の%）

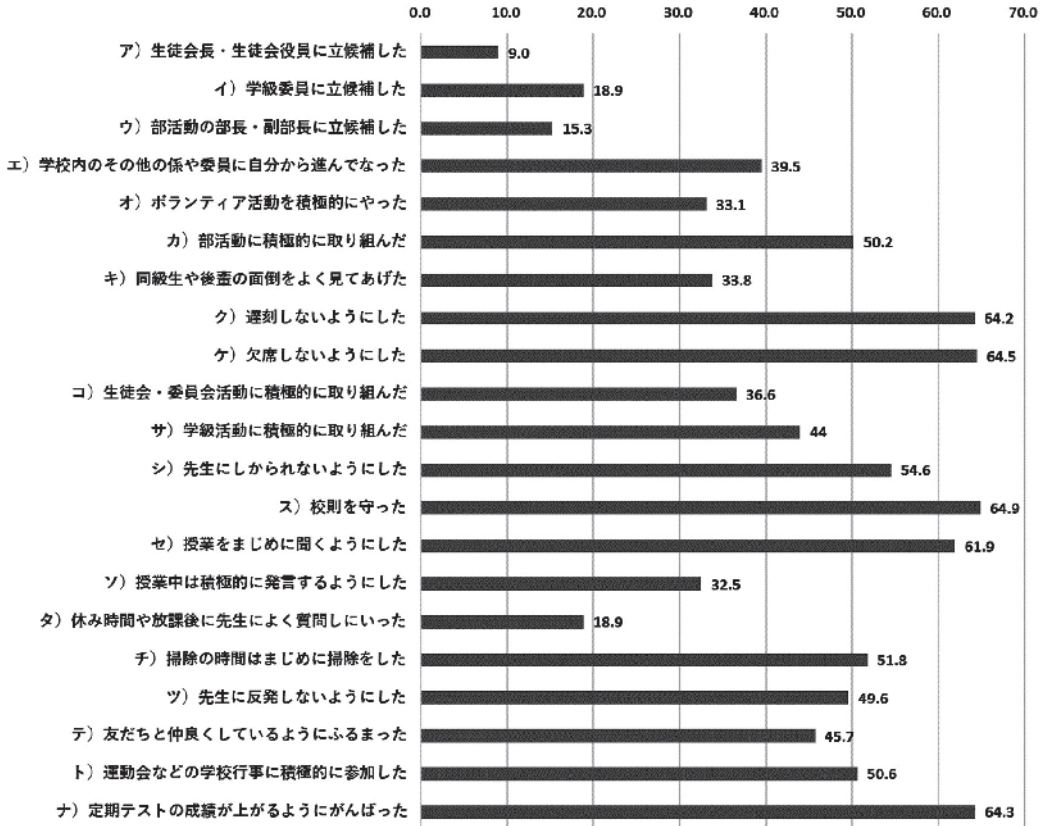


図 5 中学時代に内申書を意識して行動した生徒の比率 (%)

目すべき点である。なぜなら、そうした意欲や態度を評価されることで得をする側に回るかどうかは本人にはわかりにくいにもかかわらず、かなり肯定的にとら

えているからである。ここには、学力検査等の成績を上げるよりも、意欲や態度を変えるほうが容易だ一少々うがった見方をすれば簡単に取り繕うことができ



図6 中学時代の諸行動についての内申書支配率 (%)

る—という感覚も手伝っているのかもしれない。こうした点はさらに詳細に分析することによって実態に迫れる可能性がある。なお、ア)のように内申書を教室ないし学校統制の手段として使う教師の存在も、以前から指摘されてきたことではあるが、依然として一定数いる可能性があることにも留意したい。

次の図5は、「次の項目のなかで、内申書（調査書）をよくするために、意識してやったことがあるものはどれですか？あてはまる番号すべてをお選びください。」という設問に対して、「あてはまる」と回答した生徒の割合を示している。項目数が多いため、細かくは言及しないが、非常に多くの項目で相当数の生徒たちが「内申書のために」中学校生活の様々な活動を行っていることが示されている。一見少なく見えるア)のような項目も、よくよく考えれば、生徒会長や生徒会役員に立候補している生徒自体の数が限られているわけで、立候補した生徒の数を分母とすれば、相当数の立候補者が「内申書」を意識しての立候補だった可能性が高い。この点は次の章で検討する。

4 調査書利用を意識した行動の分析

A 内申書支配率

図5で示したように、中学生たちは非常に多くの活動について「内申書」を意識しながら生きている。そして、内申書を意識した行動はつねに、学校や教師にとって望ましい意欲や態度、行動を示すために行われるとみてよい。こうした状況は「良い子競争」とでもいべき状況を生み出しており、中学校生活が歪められているおそれがある。そこで、本節ではその点を少し掘り下げてみたい。

調査票を作成する段階において、内申書を意識して行動した人の数と、内申書を意識したかどうかに関わりなくなされた行動者の数とを比べることで、内申書の支配力のようなものを推し量ってみたい。仮に、 $(\text{内申書を意識した行動者数}) / (\text{総行動者数}) \times 100 = \text{内申書支配率}$ とすると、図5のア)～ウ)についてはQ13でまったく同じ聞き方をしているのので、この支配率が計算できる。その結果、ア)の「生徒会長・生徒会役員の立候補」については $266/363 \times 100 = 73.3\%$ 、イ)「学級委員の立候補」については $562/829 \times 100 = 67.8\%$ 、ウ)

表 3 高校入学難易度別・中学時代の行動および当該行動への内申書意識

| 行動項目 | 入学難易度：難 | | 入学難易度：並 | | 入学難易度：易 | | 検定の結果 | |
|----------------------------|---------|----------------|---------|----------------|---------|----------------|-------|-----|
| | 平均値(A) | 内申を意識しての行動率(B) | 平均値(A) | 内申を意識しての行動率(B) | 平均値(A) | 内申を意識しての行動率(B) | A | B |
| ア) 生徒会長・生徒会役員に立候補した | 0.171 | 0.121 | 0.118 | 0.089 | 0.081 | 0.061 | *** | *** |
| イ) 学級委員に立候補した | 0.369 | 0.228 | 0.262 | 0.195 | 0.212 | 0.148 | *** | *** |
| ウ) 部活動の部長・副部長に立候補した | 0.234 | 0.157 | 0.196 | 0.156 | 0.171 | 0.145 | ** | |
| エ) 学校内のその他の係や委員に自分から進んでいった | 3.604 | 0.415 | 3.334 | 0.423 | 3.091 | 0.352 | *** | ** |
| オ) ボランティア活動を積極的にやった | 3.060 | 0.322 | 2.966 | 0.366 | 2.807 | 0.308 | *** | * |
| カ) 部活動に積極的に取り組んだ | 4.019 | 0.485 | 3.859 | 0.563 | 3.515 | 0.461 | *** | *** |
| キ) 同級生や後輩の面倒をよく見てあげた | 3.714 | 0.346 | 3.478 | 0.375 | 3.174 | 0.295 | *** | *** |
| ク) 遅刻しないようにした | 1.569 | 0.640 | 1.567 | 0.678 | 1.831 | 0.611 | *** | ** |
| ケ) 欠席しないようにした | 1.478 | 0.661 | 1.599 | 0.678 | 2.050 | 0.601 | *** | *** |
| コ) 生徒会・委員会活動に積極的に取り組んだ | 3.312 | 0.406 | 3.088 | 0.397 | 2.713 | 0.300 | *** | *** |
| サ) 学級活動に積極的に取り組んだ | 3.620 | 0.455 | 3.427 | 0.482 | 3.051 | 0.388 | *** | *** |
| シ) 先生にしかられないようにした | 1.926 | 0.517 | 1.998 | 0.603 | 2.137 | 0.520 | ** | *** |
| ス) 校則を守った | 4.138 | 0.619 | 4.115 | 0.701 | 3.984 | 0.629 | * | *** |
| セ) 授業をまじめに聞くようにした | 4.073 | 0.623 | 3.955 | 0.665 | 3.671 | 0.572 | *** | *** |
| ソ) 授業中は積極的に発言するようにした | 3.183 | 0.403 | 2.856 | 0.329 | 2.464 | 0.249 | *** | *** |
| タ) 休み時間や放課後に先生によく質問にいった | 2.406 | 0.215 | 2.278 | 0.211 | 1.981 | 0.145 | *** | *** |
| チ) 掃除の時間はまじめに掃除をした | 3.779 | 0.489 | 3.821 | 0.579 | 3.710 | 0.488 | | *** |
| ツ) 先生に反発しないようにした | 2.252 | 0.450 | 2.195 | 0.567 | 2.273 | 0.472 | | *** |
| テ) 友達と仲良くしているようにふるまった | 4.130 | 0.418 | 3.987 | 0.509 | 3.772 | 0.444 | *** | *** |
| ト) 運動会などの学校行事に積極的に参加した | 4.098 | 0.502 | 3.899 | 0.550 | 3.594 | 0.468 | *** | ** |
| ナ) 定期テストの成績が上がるようにがんばった | 4.189 | 0.735 | 3.698 | 0.661 | 3.266 | 0.539 | *** | *** |

※Aはア)～ウ)が0 or 1のダミー、エ)以降が1～5の五段階の尺度、Bはすべてが0 or 1のダミー

※検定は、Aのア)～ウ)およびBはカイニ乗検定、Aのエ)～ナ)はマンホイットニーのU検定を行って判定している。

※網掛け部分は有意に他群より高い箇所を示している。

***: $p < 0.001$, **: $p < 0.01$, *: $p < 0.05$, †: $p < 0.10$.

「部活動の部長・副部長の立候補」については453/593×100=76.4%と、かなり高い内申書支配率になった。さきほどの懸念は裏付けられたことになる。エ)以降については、総行動数を「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の合計値として同様の計算をしてみた³⁾。その結果が図6である。

内申書を意識しての行動を尋ねるQ10と一般的行動を尋ねるQ13では2択か5段階尺度かの違いがあるため、参考数値として見る必要がある。例えば、タ)及びナ)では、選択肢の違いから総行動数のほうが若干少なくなり、100%をわずかに超えてしまっている。ただ、こうした誤差はあるとしても、内申書支配率ほどの行動においてもきわめて高くなっていることから、おそらく内申書支配の実態をかなりの程度反映していると推測され、まさに「生活すべてが受験」(中村2020)に近い印象を受ける結果となっている。

B 内申書支配と高校入学難易度

では、こうした内申書支配の構図は、特定の層に偏りなく生じているのだろうか。この点についての詳細な分析は今後の課題としたいが、現時点でとらえてい

る一つの実態は例示しておく。

本調査の対象は高校生であるので、現在通っている高校の入学難易度を尋ねることによって、当該高校生の受験した学校特性を考慮できるようにしている(Q6)。これは見方を変えれば、当該高校生の高校受験時における学力レベルをある程度反映していると考えられることもできる。大学入試においては、調査書を用いた推薦入学制度(推薦入試制度)はエリート選抜よりも大衆化時代におけるマスを対象とした選抜で用いられる傾向にあったとされる(中村1996, 2011)。そうであるならば、高校入試においても同様の傾向がみられる可能性がある。そこで、先ほど来使用しているQ10, Q13といった各種行動のデータを高校入学難易度で分割して検討してみた。その結果を示しているのが、表3である。

統計的検定は入学難易度3群間の差を示しているの、ほとんどの行動項目で高校入学難易度による差が統計的に有意であるということである。表の中の(A)が先ほど述べた総行動項目Q13にあたるものだが、入学難易度が高いグループの行動率が高い。学校適応的で成績も良好であったと思われるこの群の模範的行動

は他群よりも目立つということだろう。一方で、注目できるのは、内申書を意識しての行動率である（B）である。これに関しては、総行動とは異なり、入学難易度中程度の高校生において特に行動率が他群より高くなっている項目が圧倒的に多い。この結果は、先ほど述べた内申書選抜＝マス選抜仮説を支持する結果である。

前章の基礎集計の分析でも示したように、内申書選抜は多くの問題があるもののかなりの生徒たちに支持されている面がある。それは、内申書選抜システムをこうしたマス選抜装置として見ることで、解釈可能な面がある。大学入試においては学力検査中心の選抜は学力の高い層で支持されがちであったが（中村2011）、それは高校入試においても同様かもしれない。中間層で内申書適応的な行動が目立つのもそうした仮説と符合している。もちろん、現時点では詳細な分析が加えられておらず、仮説の域をでないが、今後さらに検討を加えることで、その仮説の妥当性を検証していく予定である。

5 おわりに

本稿では、これまで必ずしも教育社会学において焦点が十分に充てられてこなかった高校入試に注目し、とりわけ昨今の教育改革で話題の主体性評価を担う制度としての調査書（内申書）選抜の実態を、全国調査のデータから示してきた。現時点ではまだ第一次中間報告の段階であるが、本稿の基礎的分析だけでもいくつか重要なポイントが析出できた。1)高校受験時における内申書選抜が中学生の行動を大いに制約していること、2)その制約はしばしば学力的に中間層の生徒に意識されがちである可能性があること、などである。こうした分析結果を踏まえて、今後さらに詳細な分析を加えていく予定である。また、データの信頼度を高めていくために、ウェブ調査および調査会社のモニターをサンプルとすることによる制約についても何らかの改善の方法を検討していく必要がある。

いずれにせよ、本研究を一つのきっかけとして、高校入学者選抜に関する教育社会学実証研究が増えていくことを期待したい。⁴⁾

（注）

- 1) 調査は、株式会社マクロミルに委託して実施した。
- 2) 本研究はJSPS科研費特別推進研究事業（課題番号25000001）に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては2015年SSM調査データ管理委員会の許可を得た。
- 3) ク(ケ)シ(ツ)については、総行動数を問う質問を逆転して尋ねているため、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を合算したものを計算に使用した。例えば、クであれば「遅刻が多かった」と尋ねているため、「あまりあてはまらない」「まったくあてあまらない」人の合計を「遅刻をあまりしなかった人」と仮定して集計している。
- 4) 本研究はJSPS科研費基盤研究(B)（課題番号19H01638：研究代表・中村高康）による研究成果の一部である。

（参考文献）

- 藤田英典, 1980. 「進路選択のメカニズム」 山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣, pp.105-129
- 樋田大二郎・岩木秀夫・耳塚寛明・苅谷剛彦編, 2000. 『高校生文化と進路形成の変容』学事出版
- 樋田大二郎・苅谷剛彦・堀健志・大和多直樹編, 2014. 『現代高校生の学習と進路—高校の「常識」はどう変わってきたか?』学事出版
- 三輪哲・石田賢示・下瀬川陽, 2020. 「社会科学におけるインターネット調査の可能性と課題」日本社会学会編『社会学評論』281, pp.29-49
- 中村高康, 1999. 「受験体制としての『調査書重視』—入学者選抜にみる教育システムの変容」古賀正義編『〈子ども問題〉からみた学校世界 生徒・教師関係のいまを読み解く』教育出版, pp.28-46
- 中村高康編, 2010. 『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房
- 中村高康, 2011. 『大衆化とメリトクラシー—教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会
- 中村高康, 2020. 「生活全部が「受験」になる…大学入試改革「主体性評価」の危うさ—高校生活の「受験従属システム化」」『現代ビジネス』<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/71054>
- 中西祐子・中村高康・大内裕和, 1997. 「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層—1985年SSM調査データの分析を通じて」『教育社会学研究』第62集, pp.61-82
- 尾嶋史章編, 2001. 『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代』ミネルヴァ書房
- 尾嶋史章・荒牧草平編, 2018. 『高校生たちのゆくえ—学校パネル調査からみた進路と生活の30年』世界思想社
- 大和多直樹, 2020. 「eポートフォリオの入試利用をめぐる功罪」中村高康編『大学入試がわかる本—改革を議論するための基礎知識』岩波書店, pp.129-148
- Rosenbaum, James E. 1976. *Making Inequality*. John Wiley and Sons.
- Tourangeau, Conrad & Couper, 2013. *The Science of Web Surveys*. Oxford University Press. (=2019. 大隅昇・鳩真紀子・井田潤治・小野裕亮訳『ウェブ調査の科学—調査計画から分析まで』朝倉書店)

吉村治正. 2020. 「ウェブ調査の結果はなぜ偏るのか」日本社会学会編『社会学評論』281, pp.65-83